

学位論文審査の要旨

学位申請者	野口 美美 比較社会文化学専攻2015年度生		論文題目	談話における否定応答詞と否定応答表現	
審査委員	主 査:	竹村 明日香 准教授	インター ネット 公表	学位論文の全文公表の可否 :	可
	副 査:	浅田 徹 教授		「否」の場合の理由	
	副 査:	谷口 幸代 教授		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む	
	審査委員:	山腰 京子 教授		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある	
	審査委員:	李 址遠 講師		<input type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている	
学位名称	博 士 (人文科学)			<input type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている	
(英語名)	(Ph. D. in Japanese Linguistics)			<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている	
				※本学学位規則に基づく学位論文全文の インターネット公表について	

学位論文審査・内容の要旨

本研究は、日本語談話における否定応答詞と否定応答表現について分析を行ったものである。分析の観点は多岐にわたり、近代から現代にかけての歴史の変遷や、性差・年齢差による使用形式の異なりを取り上げるほか、従来十分な検討が行われてこなかった否定応答表現の諸形式についても分類を試みている。また、これらの分析結果を日本語教育に活かすことを研究目的の一つとしており、日本語学と日本語教育の横断的な研究として位置づけられる。

本論文の構成は全7章からなる。
第1章では、先行研究史をまとめて問題点を指摘した後、用語の定義をし、調査資料について説明を行う。
続く第2章では、近代から現代に至るまでの否定応答詞の様相を報告する。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』と『日本語歴史コーパス』明治・大正編を比較し、最も古くから用いられていた「いや」ほどの年代でも圧倒的な割合を占めるのに対し、「いや」「いえ」は時代を経るごとに減少し、反対に「いいえ」は増加傾向にあることなどを報告する。

第3章では男女の性差に着目して否定応答詞の使用実態を分析する。男女ともに「いや」の使用割合が高いが、「いえ」「いいえ」「うん」は女性の使用率が高いことや、「いえ」「いいえ」が敬体で用いられやすいこと、女性は男性に対してあまり否定応答表現を用いないといった男女での使用の偏りが指摘されている。

第4章では否定応答表現の諸形式を分類し、7つに大別して提示している。分類の中でも「会話の焦点シフト」という語用論的な用法を一分類に立てることで、固定された形式を持たない否定応答表現も談話で重要な位置を占めていることを示す。

第5章では真偽疑問文に対する否定応答表現を分類し、応答のパターンについても言及する。その結果、真偽疑問文に対する否定応答では否定の意味を持たない形式の使用が半数を超えており、特に「会話の焦点シフト」と名付けた語用論的な否定応答表現が最も多く用いられていることを指摘する。

第6章は対話相手との年齢差に着目した真偽疑問文に対する否定応答表現について取り上げる。ポライトネス理論を用いて分析した結果、同年代との対話ではポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを選択するため直接的かつ明瞭な否定形式を用いること、年上から年下への対話では、力を持つ年上の者が必要以上に強い否定とならないようネガティブ・ポライトネス・ストラテジーを用いるほか、様々な言語的配慮をしていることが明らかになった。また年下から年上では否定そのものを回避する傾向なども確認されたことを報告する。

そして終章では、各章での調査結果をまとめた上で、日本語教育においてこれらの日本語での使用実態をどのように反映できるかという点について述べる。

第1回審査委員会は2024年8月6日に開催された。審査では、多くの先行研究を踏まえて慎重に議論を進めている点や、コーパスを用いて緻密な実証研究を展開している点などが評価されたものの、図表や出典、文章に説明不足な点があることや、否定応答表現の分類に不十分な点があること、ポライトネス理論を取り扱う際のFTAに対する扱いなどについて指摘が行われた。

申請者はそれらに対して誠実に対応し、2025年1月10日に修正版を提出した。その修正版に対して第2回目の審査が行われ、同年1月24日に、公开发表会・最終審査に進んでよい旨の決定が下された。公开发表会は2025年2月18日に行われ、申請者は博士論文の概要を明快に説明し、聴衆や審査員からの質問に対しても的確かつ適切な回答を行った。以上により、最終審査会にて、本論文は博士(人文科学)、Ph. D. in Japanese Linguisticsにふさわしいものであるとの判断が全員一致の合意により下された。

公开发表会・最終試験結果の要旨

公开发表会では、申請者による博士論文の概要説明がパワーポイントで30分間行われた後、聴衆・審査員との質疑応答が約30分間行われた。

概要説明では、否定応答詞と否定応答表現を分類した結果や、現代日本語での使用の諸相、歴史の変遷などについての説明が説得力を持って行われた。

質疑応答においては、日本語教育と日本語学での探究の間に生じる問題点や、近年新しく生じてきた否定表現形式についての取り扱いなどについて質問が出された。それらに対し、申請者は適切な用例を挙げつつ、丁寧かつ説得力のある解説を行った。

これにより審査員は全員一致で、本論文を博士(人文科学)、Ph. D. in Japanese Linguisticsにふさわしいものと判断した。